

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 19 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26870018

研究課題名(和文) 医学展示における女性の身体表象の実証的研究 ヨーロッパと日本を事例として

研究課題名(英文) An Empirical Study on the Representation of Female Bodies in Medical Displays:
Focusing on Europe and Japan

研究代表者

妙木 忍 (MYOKI, Shinobu)

東北大学・国際文化研究科・准教授

研究者番号：30718143

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「科学的」とされる医学分野において女性の身体がどのように表象されてきたのかを考察することを目的とし、ヨーロッパの医学博物館と日本の秘宝館について検討したものである。主な分析対象は、フランス、イタリア、オーストリアの医学博物館にある解剖学用ヴィーナスおよび日本の秘宝館に展示されていた医学模型や女性の蠟人形である。複製身体がまなざされる対象となる過程の考察もおこない、ジェンダー研究や医学史の観点から検討をおこなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to examine how female bodies have been exhibited in the field of medicine, which was considered to be “scientific”. The main objects of this research were the “Anatomical Venuses” at medical museums in Italy, France and Austria, and the medical displays and realistic life-size female human dolls in Japan’s Hihokan Erotic Museums. This study also analyzes the process by which these bodies became the object of gaze, as seen from the perspectives of gender studies and medical history.

研究分野：社会学

キーワード：文化資源学 ジェンダー研究 医学史

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「科学的」とされる医学分野において、女性の身体がどのように表現されてきたのかを、ヨーロッパと日本の事例をもとに考察するものである。医学模型は医学教育材料であると同時に、見られる対象として人々の欲望を映し出したものでもある。「科学的」とされるものにおいて、いかに社会的・文化的性差が表現され、それが当該の時代といかなる対応関係にあり、人々の思考がどのように変遷してきたのかを、歴史的に、そして実証的に分析する。医学史、文化資源学、ジェンダー研究を横断する学際的研究として発展させたいと考えた。分析対象は、日本の医学模型と女性の蠟人形、ヨーロッパの医学模型（特に、横たわる女性の蠟人形である解剖学用ヴィーナス）とする。

2. 研究の目的

(1)海外では、医学史のなかで「性差がいかにつくられてきたか」という論点は、膨大な資料の解読とともに議論されてきた。「科学的」とされる医学でさえも社会的に構築されており、あるいは逆に、「科学的」とされるものが性別を形づくっていったという解釈が成り立ちうる。この意味において、医学史は、文化資源学やジェンダー研究の研究対象となりうる。このように外側から私たちを規定する要因について社会学的な関心があり、その手がかりになるものとして、主に医学模型を取り上げたいと考えた。特に女性の身体表象に照準を合わせた。医学展示における女性の蠟人形を分析したルドミラ・ジョーダノヴァの研究は、重要な先行研究である。

(2)日本国内においては、医学史のなかで女性の身体表象の研究はまだ十分になされていない。というのも、パリ第五大学医学部のオルフィラ・デルマス・ルヴィエール博物館（すでに閉館）やフィレンツェ大学のラ・スペコラ博物館、ポローニャ大学のパラッツォ・ポッジ博物館などにあるような、女性の解剖学用蠟人形は日本に存在しないからである。このようなヨーロッパの医学博物館の蠟人形をも分析対象に含めた川井ゆうの『迫真の境地』（2004、ふみづき舎）は、にせものが持つ力や歴史に焦点を当てたものである。この先行研究は、迫真性の高い複製身体を模造し、それを人々が見る現象に関心のある本研究にとって、複製に託すイメージや、それを人々が受け取るイメージを考察する上で参考になる。

(3)日本には実は、ヨーロッパの医学展示と関係があると思われる観光施設が存在する。私はこれまでその研究をおこなってきた。それは、秘宝館（ひほうかん）と呼ばれる施設である。1972年伊勢に日本で初めて等身大人形を用いた秘宝館ができ（2007年閉館）それ以降、1970年代から1980年代にかけて、

北海道から九州まで少なくとも20カ所以上の秘宝館が存在し、1990年代以降衰退してきた。この秘宝館の起源には、医学模型があり、それは性的な蠟人形とともに伊勢の秘宝館に納入されていた（1972年10月開館当初より）。そこには、医学的な展示と娯楽的な展示が併存していた。その後の秘宝館は、主として温泉観光地に作られていったが、ここでは医学的要素が除去され、娯楽性が強化され、アミューズメントとしての訪問者参加型の秘宝館が発展した。このような医学と娯楽の接続や、医学的要素の除去の過程について研究関心を寄せた。

(4)伊勢の秘宝館にあった医学模型（性病の症例模型や胎児の成長模型、双胎妊娠模型など）がヨーロッパの医学博物館にある模型とよく似ていたことに注目し、パリのサン・ルイ病院のムラージュ博物館（ムラージュは蠟製皮膚病模型を指す）をはじめとするフランス・イタリアの医学博物館を訪れて調査を開始していた私は、本研究によってその課題を発展的に研究したいと考えた。時代や背景が異なる展示を同列に並べることはできないとはいえ、医学が人々のまなざしの対象とされる点に注目するならば、かつ、それらの展示が類似している要素を持つならば、研究対象になりうると思った。

(5)むしろ日本では、医学模型は専門家だけに公開され（医学教育材料としてのムラージュを一般公開している大学は少なく、北海道大学など、ごく少数である）、ヨーロッパでは専門家だけではなく一般の人々にもそれを公開している（大学の医学博物館など）。このような、医学情報の開示のプロセスの相違は、文化の相違とも関連して研究される必要がある。日本でかつて開催されたという衛生展覧会のことを思い起こすならば、「医学の専門化」が進んだ、とも考えられる。伊勢の秘宝館にはその古い形態が残されており、これが観光と結びついた施設で一般公開されていた歴史的な意味を検討する必要があると考えた。国際比較を通して、日本文化についても再考したいと考えた。

3. 研究の方法

(1)ヨーロッパと日本の事例を中心に、医学史の文献研究をおこなう。

(2)日本とヨーロッパの事例の情報収集と調査をおこなう。分析対象とした医学模型や女性の複製身体が展示されてきた歴史と意味を検討する。

(3)医学が人々のまなざしの対象となる現象に注目し、展示手法および、その政治性を明らかにする。

(4)日本で医学が専門家のものとなり一般公

開されなくなっていく過程および、ヨーロッパで医学が公的な空間で展示されていることの意味を検討する。

(5)社会的に構築された性差というものを、医学模型の、特に女性の身体表象から読み解き、ジェンダーが作られていく過程に注目し、理論的に検討する。

(6)複製身体がまなざされることの意味や、まなざす人々の意識にも配慮し、パロディの観点から考察するとともに、本物ではない複製が果たす役割を社会的に考察する。

4. 研究成果

(1)日本の秘宝館については、医学展示と医学的要素の除去の過程に注目した。医学的要素の除去はアミューズメント性の強化につながるのだが、それと関わる女性の蠟人形の展示についても考察した。医学展示の観点、昭和の大衆文化の一つとしての観点、消費される身体という観点、パロディの観点などから検討した。研究の過程で、時代のなかでの大衆文化の一つとしての視点や、身体が消費される構造などを検討する機会が得られたため、このような視点を研究に取り入れた。研究発表や執筆の機会に成果を公表した。

(2)海外の医学博物館の調査を実施した。具体的には、モンペリエ大学医学部の博物館（パリ第五大学医学部から移管された「スピッツナー博士のコレクション」の一部）、フィレンツェ大学のラ・スペコラ博物館、ポーニャ大学のパラッツォ・ポッジ博物館、ウィーン医科大学のヨゼフィーヌムにある、解剖学用ヴィーナスを調査した。展示されるに至った過程や歴史についての資料収集をおこない、展示の手法を検討した。モンペリエ大学医学部の博物館の学芸員、ラ・スペコラ博物館の学芸員、パラッツォ・ポッジ博物館の研究者と面会し、助言を得た。特に、イタリアとフランスのヴィーナスが作られた時代や背景の相違に注目して分析を進めた。成果の一部は北海道社会学会で発表した。

(3)解剖学用ヴィーナスが展示されていない医学博物館、例えばドレスデンの衛生博物館やパリの医学史博物館の調査もおこない、医学博物館の性質の相違について検討した。この点については、今後さらに分析を進める必要があり、今後の検討課題としている。

(4)ヨーロッパの解剖学用ヴィーナスについてはイギリス、フランス、オーストラリア、アメリカに研究者がいる。ジェンダー研究の視点、精神分析や美術史の視点、歴史学の視点、博物館の観点からの研究である。オーストラリアの研究者を訪問し、イタリアやフランスのヴィーナスの歴史的な発展過程について議論した。ヴィーナスについては国際的

に研究がなされているが、本研究では、展示物だけではなく、展示された文脈の検討も進めてきており（後述）、新たな知見からの貢献が期待できる。

(5)ブリュッセルの博物館で1979年に「スピッツナー博士のコレクション」の展覧会が開催されていることにも注目し、現地で情報収集した。当時のカタログには、展示物の記録や開催にともなう記事などの記録も収められており、展示された文脈の検討を進めている。この分析を今後さらに進める必要がある。

(6)博物館とジェンダーをめぐる本研究の経緯や経過は、「国民との科学・技術対話」で講演をおこない、成果の一部を公表した。

(7)複製身体の展示についての理論的検討は、本研究期間の前から開始していたが、本研究期間を通しても検討を継続し、パロディやアウラ論の観点から分析を進めてきた。この作業を通して、蠟人形の逼真性の分類や、解剖学用ヴィーナスとの関連を分析する論文を執筆した（刊行はまだなされていない）。

(8)当初は予期していなかったが、本研究期間中に新たに得られた視点は次の3点である。第一に、日本の秘宝館の研究から発展して、乳房の表象研究を開始した。第二に、伊勢の秘宝館に展示されていたギリシャ神話コーナーの展示の検討することにした。第三に、日本の秘宝館を事例として、失われゆく施設を分析する際の記録化の論点を得た。以上は、本研究を別の角度から深める意義がある。

(9)本研究期間に、日本のアミューズメントを支えてきた方々のライフヒストリーを記述する目標を立てていたが、十分におこなうことができなかった。今後の課題として継続して研究を続ける。

(10)ヨーロッパで解剖学用ヴィーナスが生まれた歴史的・思想的背景や、芸術との関係性についてはまだ考察が十分とはいえないので、今後の課題として継続して研究を続ける。

引用文献

- Jordanova, Ludmilla, 1989, *Sexual Visions: Images of Gender in Science and Medicine between the Eighteenth and Twentieth Centuries*, New York: Harvester Wheatsheaf. (=2001、宇沢美子訳『セクシュアル・ヴィジョン：近代医科学におけるジェンダー図像学』白水社.)
- Stephens, Elizabeth, 2011, *Anatomy as Spectacle: Public Exhibitions of the Body from 1700 to the Present*, Liverpool: Liverpool University Press.
- 川井ゆう、2004、『逼真の境地 実物どおりに着彩された等身大の人形の歴史 欧米編

♪、ふみづき舎。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計5件)

Shinobu Myoki, "Where Eroticism and Leisure merge: Bodily Displays in Japan's Hihōkan Erotic Museums," CONTENTS TOURISM: Creativity, Fandom, Neo-Destinations, 2017年3月11日、カリフォルニア大学バークレー校、サンフランシスコ(米国)

妙木忍、「日本における性の展示 秘宝館という文化装置」, 愛媛大学人文学会(招待講演) 2017年1月19日、愛媛大学(愛媛県・松山市)

妙木忍、「現代日本における性の展示とツーリズム 秘宝館という文化装置」, 英国日本研究協会、Mini-Conference: Civil Society, Tourism, Anthropology, 2016年7月30日、北海道大学(北海道・札幌市)

妙木忍、「医学展示における女性の身体表象をめぐる イタリアとフランスの解剖学用蠟人形を事例として」, 第64回北海道社会学会大会、2016年7月2日、札幌市立大学(北海道・札幌市)

妙木忍、「秘宝館の魅力と秘宝館を愛した人々」, 高知県立桃源郷 新・高知の造形文化展開催記念講演会(招待講演) 2015年2月8日、高知県立美術館(高知県・高知市)

〔図書〕(計2件)

妙木忍、北海道大学観光学高等研究センター、石森秀三・西山徳明・山村高淑編『観光創造学へのチャレンジ』(「秘宝館研究と北海道」) 2017、410(373-378)。

妙木忍、北海道大学観光学高等研究センター、山村高淑・シートン フィリップ・張慶在・平井健文・鎗水考太編『コンテンツ・ツーリズム研究の射程 国際研究の可能性と課題』(「コンテンツ・ツーリズムへの社会的アプローチ～昭和の大衆文化というコンテンツ」) 2016、253(137-146)。

〔その他〕

アウトリーチ活動(講演を含む)

妙木忍、2016、「公開研究会「娯楽観光施設の研究と記録化」」第1部講演「秘宝館の記憶・記録・分析 研究者が失われゆく文化遺産に向き合うとき」, 北海道大学総合博物館第5回博物館研究会、2016年12月2日、北海道大学総合博物館(北海道・札幌市)

妙木忍、2016、「博物館をめぐる旅 ジェンダーの視点を添えて」, 国民との科学・技術対話、2016年2月4日、藤女子高等学校(北海道・札幌市)

妙木忍、2015、「観光と女性 医学展示と秘宝館」, 平成遠友夜学校、2015年7月14日、北海道大学遠友学舎(北海道・札幌市)

妙木忍、2014、「プラス1ピースの読書会」Vol.2、「秘宝館という文化装置」, 2014年11

月11日、北海道大学大学院文学研究科「書香の森」(北海道・札幌市)

対談等

妙木忍・山村高淑、北海道大学観光学高等研究センター2014年度公開講座・連続対談「観光創造の最前線」, 第4回「昭和の旅と娯楽」再考～秘宝館からカラオケまで、日本人は何を楽しんできたのか?～, 2014年11月13日、北海道大学(北海道・札幌市)

妙木忍・石川美澄・小野朋子・小新井涼、「公開ゼミ@あかはね倉庫(TOYAKOマンガ・アニメフェスタ空き店舗イベント)」, 「“秘宝館”とは何だったのか??～消えゆく昭和の文化装置から考えるメディアと旅の意味～」, 2014年6月21日、洞爺湖(北海道・虻田郡洞爺湖町)

学会誌

妙木忍、2016、「書評リプライ」, 北海道社会学会『現代社会学研究』Vol.29、89-93。

研究発表・フォーラム等

妙木忍、2017、「複製身体と女性 医学博物館における解剖学用ヴィーナスを中心に」, 平成28年度第6回応用倫理研究会(北海道大学大学院文学研究科・応用倫理研究教育センター) 2017年1月11日、北海道大学(北海道・札幌市)

妙木忍、2016、「医学博物館とスリーピング・ヴィーナスをめぐる国際比較研究」, 第2回 TUMUG Forum(東北大学男女共同参画推進センター主催) 2016年11月8日、東北大学(宮城県・仙台市)

新聞等の署名記事

妙木忍、2015、「連載 おとなの遊艶地 秘宝館4」, 「秘宝館における医学展示」, 2015年12月、『週刊読書人増刊 PONTO』No.4。

妙木忍、2015、「性とユーモア 秘宝館の魅力」, 2015年10月号、『オール讀物』(「日本最後の秘宝館」内)。

妙木忍、2015、魚眼図「彫刻と人形」, 『北海道新聞』2015年9月4日夕刊。

妙木忍、2015、「連載 おとなの遊艶地 秘宝館3」, 「秘宝館にみる性信仰と祭り」, 2015年8月、『週刊読書人増刊 PONTO』No.3。

妙木忍、2015、魚眼図「幻の展覧会」, 『北海道新聞』2015年6月18日夕刊。

妙木忍、2015、「アート万華鏡」, 「聖ノ俗 秘宝館の記憶 信仰とユーモアの世界共存」, 『北海道新聞』2015年3月30日朝刊。

妙木忍、2015、「連載 おとなの遊艶地 秘宝館2」, 「秘宝館にみる職人魂」, 2015年3月、『週刊読書人増刊 PONTO』No.2。

妙木忍、2015、「残るはずか1館「秘宝館」消滅の危機!」, 2015年2月号、『新潮45』。

妙木忍、2014、「連載 おとなの遊艶地 秘宝館1」, 「秘宝館のマリリン・モンロー」, 2014

年 10 月、『週刊読書人増刊 PONTO』No.1.

妙木忍、2014、「消えゆく秘宝館 時代を映した鏡」、『朝日新聞』2014 年 6 月 16 日夕刊.

妙木忍、2014、「連載 ニューエイジ登場 396」「失われゆく文化遺産、秘宝館」、『週刊読書人』2014 年 5 月 30 日号、『週刊読書人』.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

妙木 忍(MYOKI, Shinobu)

東北大学・大学院国際文化研究科・准教授

研究者番号：3 0 7 1 8 1 4 3